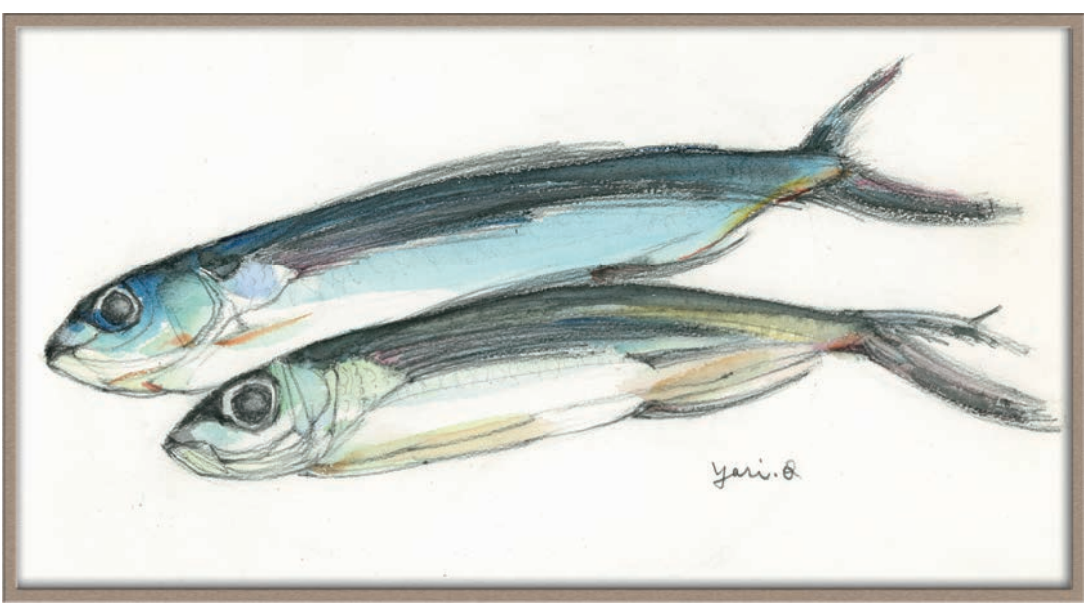
三河アララギ

２０１９年５月 皐月 さつき

五　月　号

第 六十六 巻　第 五 号



ニューヨーク日記（151）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

I live with Sherlock

Blue Shoe Diaries

一緒に暮らしている子猫のシャーロックです。かわいいでしょ？ 生後８週間ぐらいの時にシェルターからレスキューしました。食いしん坊くんでその上猫だから良く寝ています、私の上で。良く食べるからまだ1歳になっていないけどすっかりもう一人前並（？）の猫の大きさになったかな？ 猫が来て毎日が楽しくなったな。

This is Sherlock, my kitten! He was rescued from a shelter at 8 weeks old. He was tiny! He likes to eat a lot, sleep a lot, and spontaneously chase things. So it hasn't been a year yet but I think he's almost at his full grown size. Life now revolves around this little being and it's that much better for it!

目次

第六十六巻第五号（通巻七八五号）

表紙・飛魚　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（151）　Blue Shoe（2）
アカンサスの徑　御津　磯夫（4）
三河アララギ歌集Ⅱ　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々」　今泉　米子（6）
三河アララギ歌集Ⅱ　杉浦　弘（7）
まほろば　岡本八千代（8）
啓蟄　弓谷　久子（10）
ねこ科猫　今泉　由利（12）
立ち位置　阿部　淑子（13）
大丈夫　安藤　和代（14）
はこべら　清澤　範子（15）
花無き花見　伊藤　忠男（16）
梅の花　森岡　陽子（17）
河津桜　白井　信昭（18）
明日香路　杉浦恵美子（19）
君子蘭　山口千惠子（20）
春を止めるは難し　夏目　勝弘（21）
『ことよせ』　いーはとぶ
水野　絹子（22）
牧原　規惠（22）
稲吉　友江（22）
鈴木美耶子（22）
吉見　幸子（22）
牧原　正枝（23）
石田　文子（23）
森　厚子（23）
山﨑　俊子（23）
三田美奈子（23）
現代学生百人一首　東洋大学
向坂　友里（24）
國島　柚月（24）
近田　晴菜（24）
間瀬満優子（24）
濵村紗也果（25）
野筋慎一郎（25）
中川　未来（25）
尾上浩太郎（25）
森岡　陽子（26）
高橋　育郎（28）
松本　周二（30）
田中　清秀（30）
浜田　紀政（30）
柳田　晧一（31）
重野　善恵（31）
山迫　京子（31）
山元　正規（32）
森岡　陽子（32）
今泉　由利（32）
今泉　如雲（33）
植村　公女（33）
杉浦　弘（33）
田中　清秀（34）
丸山酔宵子（36）
山本紀久雄（38）
今泉　雅勝（40）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（42）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（44）
漢詩研修（三十一）　平井　茂行（46）
奥の細道　その旅立ち　中屋　保之（48）
沼津での牧水ゆかりの地を巡って（三）　鈴木　孝雄（50）
『歴代天皇御製歌』（九十九）　貫名海屋資料館（52）
『欲望と歳月』　大橋　望彦（54）
竹の子堀り　夏目　勝弘（55）
御津磯夫短歌鑑賞　鮫島　満（56）
「氷魚」のことから（220）　岡本八千代（57）
編集室だより〔二〇一九年三月〕　今泉　由利（58）
野菜・まんだら（15）　（59）
「三河アララギ」について　（60）

かさね吟行会
『酔いの徒然』（85）
楽しい時間（78）
絹の話（102）

アンカンサスの徑

御津磯夫

南米の子のたくましきをともなへば氷の菓子のしづくも甘し

一年をすぎてうれひのうすらぐも伊吹は今日も雪雲の奥

異國に生き来し三年のくるしみを楽しみいひて伊吹の下を

仰ぎゆく三上にかけて三輪山をおもふも春のま近きがため

降る雪にゆききせし日の一年をはるけきものとなつかしみする

一年は長かりしとも息長（おきなが）の春の雪見つつ今日は弾（はづ）みゆく

たづさへ来し千両萬両の稚きものけふの春日に活きつきゆかむ

楽譜より手につたひつついづる音音のやさしき常のチェルニー

難波の地下三階の人ごみにもまるる中にあひ別れ来ぬ

米原とおもふあたりの窓の雪とけて光れる夜行たのしも

三河アララギ歌集Ⅱ

大須賀寿恵

かに草の三本それぞれ異なるを一つの鉢に垂らし植ゑたり

仰ぎ見る竹をたわめて雀等はむらがり鳴けり夕まぐれ時

竹に生(な)るごとくに雀ら次々に竹の秀たわめ枝移りゆく

ひとときを薮にぎはしし雀等の声かたまりて静もりゆきぬ

薮の中暮れてゆきつつ雀等のねむりたるらし竹のなびける

白々と花かたまりてゐる梨にこゑ幼きは青蛙らし

甘藷の葉の萎えたる畑をよこぎりて十四条休職の友を見にゆく

君等二人の夕餉の中に割り込みてわれもいただく冷えし素麺

寄せ植ゑの鉢の楓の稚きに虫は蓑着てぶらさがるなり

蛙手の枝の先より花キリンの棘に蓑虫うつりゆくらし

歌集「續草々」

今泉米子

白々と曝れたるごと土固し五重の塔に歩み近づく

金堂の廊の曲り佇ちどまるいづちより吹く斑鳩の風

講堂の幕の内よりふりかへる五重の塔中門金堂の位置

薬師三尊のうしろの扉ひらかれて工事の人ら昼餉する見ゆ

斑鳩の三つの塔を見つつゆくあぢさゐは散る花にはあらず

夏靄の斑鳩寺の境内をしばしめぐりて日やけをしたり

オイラン草といひて貰ひぬ夕べには紅つやつやと蕊長き花

ふくれたる青き實ゆらに風たたず厨の外の風船葛

をかひじきのみどりを添へし朝の膳蔵王の山は雨雲の中

うろうろと居りつつ日々の迅くして庭草より立つ狐の剃刀

三河アララギ歌集Ⅱ

杉浦　弘

ひといきに芽吹き競へる木木のなか南京黄櫨（なんきんはぜ）は沈黙守る

若かりしわれに叱られ殴られしと言ひ楽しむを聞かされてゐる

去年よりの事件ひとつをさばきかね夜せまる部屋にわれら疲るる

朝な朝な仰ぎ通ひし街路樹のはこねうつぎもうつろひにけり

とるに足らぬことと思へど「教育の浮沈かかる」と彼は言ふかな

重く暗くくもりし空の西より「幸福」のごとき小さき青空

為恭（ためちか）が身を隠しゐし粉河寺御池書院は立ちのぞくのみ

色の浜にますほの小貝拾ひしもあはあはとして夏は終りぬ

「幸福なものほど鈍感なり」といふドラマ見終はりたれば寝ぬるほかなし

穂すすきの乱るるなかを分けながら大伴夫人の墓山くだる

まほろば

蒲郡　岡本八千代

昼すぎて春日照りきぬ庭一面草々萌えてみどりのまほろば

そこここに土筆のお坊の出でてゐる「土筆誰の子」としばし佇む

やはやはとはこべらの緑萌え出でてわれまで楽しくなりてくるはや

ありのままの己（おのれ）に活（くら）してゐることよ今日は今日とてわがひとり心

きっぱりとわれには今日も朝の来て我思ふ故に我のはじまり

「去る者は去りまた充ちて」かもしれぬ今宵のわれの迷ひ心よ

去る者は去るとは思へどやはり寂し決して追はずにすぎゆくわれさへ

商用にて三河に来たりて一泊せし孫との会話に夜半となりつつ

懇(こん)々と男の孫との語り合ひ老いゆくわれの今宵の幸せ

恙(つつ)みなく寂しき心のままに歩む夕雲の下の海への道を

雲までも淡々として空の中わが歩む方向に動きくるごと

生きてあらばはや次々と仕事あり今年はわれの隣組班長か

今日よりは飾りおくかな玄関に小さき小さき赤き緒の草履

玄関に春らしきもの飾りつつ今日在る己れを愉しみてをり

洗たく物陽(ひ)の当たる場所につるし替へて少し心の足らへる如し

啓蟄

豊川　弓谷久子

いそいそと迎えの車に乗り込みぬ桃の節句に招かれし朝

風も無し春の日和に里山は今満開の白梅の花

みさと共にありし年月胸に繰る五段飾りの雛人形の前

女三代猫のコテツも加はりてお雛祭りの今年の写真

七年ぶりの人に逢いたいひとまわり小さくなられし笑顔は同じ

久びさに見えし人と思い出話暫し心はタイムスリップ

少しだけ今のくらしも話されて君はホームへ帰りゆかれぬ

軒先に蜥蜴がチラりと顔見せをりと子が話しをり今日は啓蟄

春彼岸中日の今日雨となる母を葬りしあの日の如く

母の齢はるかに越えし今も尚母は愛しき母はなつかし

苦の多き一生とありき老いてより短歌を詠みし母の一首に

ほのぼのと又読み返す朝刊の「くらしの作文」に載る君の思い出

小学校卒業の日の我が思い出もよみがえり来る君の作文

庭に咲く黄色き小花の名が知りたくて草花図鑑を書棚に探す

流れ来るコマーシャルと共に呟きぬ「明日もいい事ありますように」

ねこ科猫

東京　今泉由利

天照大神に従ふ思ひに選びにき織物染色テキスタイルデザイン
日本に帰り来たりて日本語に日本のことを知りゆくは良い
ただに絹ひたすらに絹「絹の話」絹の歴史は未来の絹へ
風吹かば雨降りくれば寒かれば桜の花の健(すこ)やにあれ
白ならずピンクともあらず桜色桜の花にうずもれゐたる
桜桜タンポポはこべらイヌノフグリ満ち満つときを満ち満ちてゐる
地上には桜咲き満つ吹雪てをらむ地下鉄の窓には自らの顔
今日の日を生(い)きとし生(い)けるものどうし猫と見てゐるブラックホール
天文学の数字並べりほんのりとまろまろ輪郭ブラックホール
アインシュタインの法則とふ「ふはふは」を今朝の目覚めに見てゐることよ

ひとひらのひらひら散りくる花びらのこのひとひらにも地球引力

富士山の見えざるままの花曇り富士山側の座席にゐたる

「日本が良いなと思ふ幸せを」うれしくもつよｂｙ・ｔａｍａｙｕ

立ち位置

横浜　阿部淑子

暖かき気温の招き受けて咲くそめいよしのは開花宣言

隣席に初回の利用者自己紹介繰り返す言葉に親しみ湧きて

聳え立つ大木の枝々剪定し新緑待たで切口あわれ

公園の水道蛇口操作して水飲み水浴び天才カラス

いずれなる会の中でも最高齢役立つ立ち位置保ちゆきたし

大丈夫

豊川　安藤和代

良き友はよきライバルよ靴のひもキリリと結び五千歩目指す
マラソンの応援の声響く空庭の杏も満開となる
独り居は寂しくないかと娘に聞かれちょっと無理して大丈夫と言う
ひよの声きびきびとして葱刻む吾もいつしかリズム軽やか
弥生三月心そわそわ美容院ネールもピンク全身に春
春の陽がやさしく照らす縁側に夫の思い出車いす座す
いづこにか美味しいものを見つけしや吾置くみかんに鳥達のこず
葉の香り好き嫌いなどと孫達は大騒ぎしつ桜餅食ぶ
子等の声空に響きて花ももも満開の村今日春祭り
爺ちゃんと幼の遊ぶ声聞こゆお隣りの庭陽ざしのやさし
「心には骨がないから折れません」師の御言葉に強く生きなん
吾が歌を楽しみ待つとふ友ありて続けられますこの月も又

はこべら

春日井　清　澤　範　子

椿に続き雪柳はポツポツと芽吹き始めぬ我が家の春は
新らしく電話器買ひ替へかけてみるかける操作を娘に聞きて
スーパーに行く道の辺に白梅は吾が背丈程の枝にて香れり
スーパーに吾が行く道の梅花に春の温もり感じつつ
休日の朝の六時は未だ早し鳥の声聞く床の中にて
堤防の芒は吾が背越しにけり波紋を見むと土手に寄り行く
堤防の芒は高く延び繁り川面の波紋見え隠れする
日毎書く家計簿に日記の欄ありて今日はアララギ届きたること
スーパーに行く道の辺の梅の花天に向ひて強く咲きをり
休耕の畑に生えしはこべらは白く可愛いく花をつけたり
北国は雪の予報を伝へつつ桜前線南にありて
紅白の椿の枝に椋鳥の枝渡りするを楽しく見つむ

花無き花見

大阪　伊藤忠男

東京の開花知らせに公園を見回りつぼみ膨らみを見る
花の無き花見心に咲く花を思い描いて巡る大川
つぼみ見る花見リベンジいつになる次なる花見花ある時に
改元に込める願いはともかくも水害地震被害無きなば
肌寒い卯月の朝は花冷えか桜の開花たより無くとも
菜の花にタンポポすみれ野の花に春告げられて島も微笑む
世が世なら棚田広がるこの景色今は単なるる山の斜面か
島めぐる時間僅かに20分産廃アートにちりばめられて
４千の人を育む歴史あり今や８００豊島に何が
頭では学ぶ津波の恐さとて身を持て得るはその比にあらず

梅の花

東京　森岡陽子

駅裏の屋台にぎ合ふ夕方は温度は急に八度も上がる
陸奥の旧家の雛段みやびなり漆塗り華やか際立つ御道具
屋敷裏たわわに実る金柑は横風強くも実一つ落ちず
満開の白水仙と紅の木瓜池を挟んで春へと向かふ
花笑みて我家の老梅たけなわに鶯目白雀はな遊び
整形のＢＧＭは子守唄眼科に流るる映画のテーマ
梅園の茶室の庭は風情なる築山の岩雨上りの苔
花ミモザ介護施設の玄関に御辞儀の如やお客迎へる
春泥に次に置く足戸惑ふは小さな一歩か大きな一歩か
近寄りて香楽しむ梅の花離れて眺む梅の枝ぶり

河津桜

豊川　白井　信昭

相楽より届きし蜜柑山畑に切りにき叔母の袖の香ぞする
袋ごと食べても甘い早生蜜柑モノレールにて運びしことも
晴れ渡る駿河湾航くカーフェリー富士山すそ野棚引ける雲
船の上に明るい日差しふり注ぐテーブルに食む妻と弁当
紺碧の海広がり懐かしい伊豆の記憶を繋ぐ航跡
土肥よりはリアス海岸隧道のR一三六山縫いつつ
トンネルの幾つぬけ来て海岸の堂ヶ島の宿遠い思い出に
災害の教訓胸に刻みつつ七滝ループ橋今し上がりゆく
R四一四天城峠越え湯ヶ島の『伊豆の踊子』執筆の宿すぐ
あの日から八年たちぬ震災の津波語りつぐテレビの映像

明日香路

蒲郡　杉浦恵美子

春の宵共に飯食ふてふことを噛みしめてをり疑似母娘として
話題には亡き人のこと多かりき然う然う今日は母の命日
思ひ出でて後に命日とを知れり母居らずして既に四半世紀
もの凄く濃き砂糖水飲み干して糖尿病検査今始まりぬ
我が躰の内にて何が起こりゐる見えない故に不安が増せり
糖尿病予備軍とぞ検査結果実は他にも幾つか予備軍
弟も我と同じく歳重ね望郷の念湧きつつあるか
姉らしく蜜柑購ひ持たせたりおそらく母がしたるごとくに
その昔こんな小径が其処彼処クルマさへなければこれにて足れり
明日香路を行くバスさっき出たばかりえいや歩こう春の陽気を
明日香路を歩けばこれほど狭き地に遺跡が沢山古人の生活圏
藤原鎌足誕生地てふ神社にはぽつんと我が身が佇むばかり

君子蘭

豊川　山口千恵子

側溝にたまりし落葉おし流し夕べの雨の激しかりき
二羽の鳩何か啄み庭歩む突然とび立つ一羽また一羽
窓の辺の裸木の楓しづまりて細枝つやめき増せるこの頃
一年の村の役員の選挙ありはり出されたるをメモして帰る
かさかさと楠の落葉踏みてゆくそこから曲りて露地に入りゆく
わが村に枝はり高き大楠は九百年の年を経るとぞ
みどり葉の間より白き蕾みゆ今年は花咲くわが君子蘭
夏の間に水やりひかへし君子蘭つひに蕾の出でくるきざし
君子蘭の蕾すくすく伸びてこし淡きみどりに色変はりつつ
ぽきぽきと音させ菜花の薹をつむ片手いっぱい瑞々として
はやく過ぐ一週間の積みかさねはや三月の終りとなりぬ
昼吹きし風も夕べに治まりて厨にアサリことこと煮ゆる

春を止めは難し

豊川　夏目　勝弘

庭すみにいち早く咲くはホトケノザとヨーロッパよりのヒメオドリコソウ
ホトケノザとヒメオドリコソウとがせめぎ合ふ庭の空地の狭き一角
ホトケノザとヒメオドリコソウとの花盛り今の我が家の花壇なりけり
外来種に負けじと繁るはホトケノザ仏陀の在せる大和の国ぞ
春耕に黒ぐろ広ごる畑（はたけ）ありまたホトケノザの花盛りの畑（はた）
広びろと冬田の広ごる一枚にゆるりゆるりと赤きトラクター
一毛作となりし冬田の一所に数羽の白サギの動くことなし
車窓より白き富士の山見えしその一点に工場が建つ
いつしかに草の名前を覚えゐしスミレタンポポレンゲソウ
山下の道は日日の散歩道レンゲスミレを見ずになりたり
在来種は駆逐されゆき今は憎きアメリカセンダンソウの長けり繁れり
薄氷も見ることもなく過ぎてきぬ桜の花は変はらず咲きぬ

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

コントラバスを奏でし女生徒器（き）に融けて恰も一つの楽器となりつつ　水野絹子

両親（ふたおや）の世話になりにし人々の頻りに気になる寒（かん）の雨の夜

大寒の冷えに冷えたるこの日よりみそ仕込みたる無心にわれは　牧原規惠

窓の外みかんつひばむ小さき鳥春を告げるか何鳥なるや

わが描きし菜の花花の絵手紙を卒園間近の孫に送らむ　稲吉友江

蜂蜜の琥珀色なる深き色如月の窓辺に今日の陽光る

牧水の旅の姿の像の前なぜかあくがれの心わきつつ　鈴木美耶子

いただきてはや三ヵ月か胡蝶蘭咲き終へし花今朝もその花

店閉づる人形店の媼言ふ傍らの雛らほほえみの中　吉見幸子

一輪の福寿草咲きたり苔の中黄の色味と苔の翠と

天草の入江に建つは「壁谷真珠」ああ桟橋に君の養殖所
初市の終はりて広き「壁谷真珠」土間は乾きてただ広々と

牧原正枝

一年生曾孫は憶へし七草を吾に教へり早口ことばで
立春の空高々と鳶の声つがひで鳴くのか連呼しながら

石田文子

壊しかけの隣の家にも吾が庭の緑の葉にも春雨のふる
おひなさま飾る仏間に日のさしてあふるる声に嬰児の声も

森　厚子

ときどきに我を気づかひ文くれし叔母の弱音の多くなりつつ
鳥の群れ近づく我に気づきしか青海のなかへなかへと遠く

山﨑俊子

菜の花の日に日に長けてわが畑（はたけ）けふの日暮れのその花明り
涅槃西風（ねはんにし）吹きくる中の白波の美しきかなわが三河の海よ

三田美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

水高生鮪も鰹もさばけます自信あふれる就職試験

静岡県立焼津水産高等学校三年　向坂友里（むこうざかゆり）

友達にとつぜんされた呼びすてに気づいたらもうドキドキしてる

沼津中央高等学校二年（静岡県）　國島柚月（くにしまゆづき）

数Ⅰの問題解く手が動かないコップの氷カランと響く

光ヶ丘女子高等学校一年（愛知県）　近田晴菜（ちかだはるな）

帰宅して猫のふーちゃんひざに乗せあんたはいいねとついついボヤク

光ヶ丘女子高等学校一年（愛知県）　間瀬満優子（ませまゆこ）

なにもかも中途半端な君だけど私にとっては一等賞さ

帝塚山学院高等学校三年（大阪府）　濵村紗也果（はまむらさやか）

書道とは自分の心写しだす心の鏡に嘘はつけない

大阪府立狭山高等学校一年　野筋慎一郎（のすじしんいちろう）

車道側歩いていたのに気づいたら逆になってる君の気遣い

近畿大学附属高等学校一年　中川未来（なかがわみらい）

新学期ノートに綴る一文字目なぜだかいちばん緊張してる

橋本市立紀見北中学校二年（和歌山県）　尾上浩太郎（おのうえこうたろう）

贈呈誌

森岡陽子

月虹　２０１８年２月

○鋭き声を残して雪の枝去りしヒヨドリそののち音沙汰あらず　八幡道子

○望郷をいふ男ありふるさとの酒をし飲めば父をおもふと　鮫島満

鹿児島アララギ　３月号

○はふり上げし菓子をめがけて急降下に鳶とらへゆくを眼に追ひぬ　森枝むつ美

○北帰行の鶴数十羽わが島を列整へつつ北へと向かふ　中山タマエ

○山峡は濃霧に包まれ朝明けに牛は鳴き合ひ挨拶交はす　江藤金博

冬雷　２０１９年３月号

○床下を走る音消ゆネズミとの攻防ひと月やつと静かに　青木初子

○一葉も残さず立てる柿の木の細枝にひとつ熟柿が照らふ　姉川素枝子
○羽音たて頭の上をゆく鴉リーダーらしきが寄り添ひてをり

冬雷二〇一七作品年鑑十自選合同歌集

○山峡のけふの小春日たふとびて朝より雪の用意に余念なし　橋本佳代子
○きらつきらと朱色の太陽昇りきて漂ふ小さき雲の紅　橋本文子
○噴火後の黒い岩肌の西之島一羽の鳥が写し出される　山田和子
○濃淡のみどりさやかに屋敷樹々の若葉がうねるひすがらの風　吉田綾子
○一鉢が三鉢となり又増えるいつまで続くわが鬼ごつこ　涌井つや子

柊　十二月号

○ぬばたまの未だ青きをなぎ倒し右に左に雨は渦巻く　片山君子
○裏庭の使わずなりし焼却炉覆い尽して朝顔咲けり　不破和子

ひまわりの咲く丘

高橋育郎　作詞

ひまわりの丘は　おひさまの丘
明るくまばゆい　ひかりの丘
ひまわりはおひさまが　大好きだから
うれしくなって　友だちになりました
小鳥もいっしょに　よろこびの歌をうたっているよ

ひまわりの丘は　いつもニコニコ
笑顔が大好き　元気な丘
ひまわりはひかりの輪　輝きの花
朝から晩まで　おひさまと歌います

みんなもいっしょに　しあわせの歌をうたいましょう

ひまわりの丘は　青空の丘
見あげてみようよ　高い空
天使たちがとんでいる　呼んでみよう
つばさをひろげて　舞いながら降りてくる
しあわせ色の　花束の香に包まれましょう

「ひまわりの丘は　悲しみとお別れする丘です。
　あしたのよろこびを　迎える丘です
　みんなでとこしえの幸を　祈る丘です」

『俳句』

大洋を望む台地や涅槃西風
丘に立てば丸き地球の海や春
突如来て知らぬ間に去る春疾風

松本周二

鱒を食ぶ真青な渓のろばた焼
波乗りのうねり待ち浮く春日かな
虹鱒の黒影棲む水の底

田中清秀

廃校の人声もなく桜咲く
亡友の愛でし桜に一人旅
春の水水車の回る蕎麦処

浜田紀政

青空へ爆発するや花こぶし
チューリップ肉厚の葉のままにあり
庭の花より道端の菫かな

柳田晧一

銀シャリにさみどり映ゆる菜飯かな
沈丁花風運びくる薫りかな
ふと見上ぐ空に朧の丸い月

重野善恵

行き過ぎて戻りて見上ぐ初桜
ビックバンド卒業ライブジャズに酔ふ
袴姿の握手とハグの卒業式

山迫京子

レガッタのオールの揃ふ春の川
まんさくの咲くといふより綻びぬ
岸近く水盛り上ぐる鱒の群

山元正規

雛菓子の包み大事に皺伸ばす
古池の倒木の間間鱒泳ぐ
一鳴りと犬一吠ゆる春の雷

森岡陽子

釈尊の入滅の日や西行忌
注目を集めて開く初桜
栞して芭蕉の恋句春麗

今泉由利

ゼミ室に関西弁も山桜
枡形に常夜燈かな土筆坊
花人や正調津軽言葉とて

子の言葉あふれ出しをり初桜
ジャングルジムの天辺にあり春の城
駄菓子屋に立ち止りをり春たのし

春疾風夜の高圧線うなる
靄ごもる渓の奥処の朝桜
瘤々の椨の古木の花こぼす

今泉如雲

植村公女

杉浦　弘

かさね吟行会
「東京都庭園美術館」　三月

田中清秀

八角形の部屋にドームの天井、落ち着きのある木製の机と椅子が置かれ、そして床が廻って外の景色と光をいつでも自由に変えることができる、そんな夢のような書斎がある。さらに玄関ロビーにはガラスの大きな香水塔が置かれ微かな香りが漂い来賓客を心地よく迎えてくれる。この旧朝香宮邸はアール・デコ洋式の明治の皇族のお住まいだ。今回のかさね吟行会はこの建物と庭園が残されている東京都庭園美術館を散策した。

朝香宮は久邇宮朝彦親王の第八王子鳩彦（やすひこ）王が明治三十九年に明治天皇から宮号を賜り創設された宮家である。明治天皇の第八皇女允子（のぶこ）内親王と結婚され、二年半余りのパリでの生活を経て後、昭和八年ここ白金に邸宅を建築した。

花馬酔木郵便届く朝香邸　　周二
日溜まりの馬酔木の花に触れてみる　　京子
沈丁花の木陰に幽か池の鯉　　素山

アール・デコ洋式は一千九百十年頃からフランスを中心にヨーロッパに波及した工芸、建築、絵画、ファッションなどの装飾様式で従来の伝統にとらわれない新しいデザインであり、直線と立体の知的な構成と幾何学模様が特徴である。邸宅の外見は玄関ポーチの狛犬以外はほとんど装飾が見られないが内装は粋を尽くした瀟洒な建物となっている。主要な内装のほとんどはフランスのデザイナー、アンリ・ラバンが担当、また、正面玄関のガラスの女神像のレリーフ、大客室のシャンデリアなどは同じくフランスの宝飾デザイナー、ルネ・ラリックの作品である。加えてフランス人芸術家の作品が幾つか使用されており、世界のアール・デコ洋式の個人住宅の中では質が高く、保存状態が良ことから国の重要文化財に指定されている。また、どの部屋の照明も見とれるほど見事で、特に姫宮寝室の前には色とりどりのステンドグラスを多角形に組み合わせた洒落照明が下がっている。

アール・デコ様式にして春の夢　　由利
一枚の写真にひかり春の午後　　陽子
春浅し競ひ膨らむ枝の先　　れい子

庭園は芝生広場と日本庭園、西洋庭園があり季節ごとに様々な花を楽しむことができる。中でも日本庭園は、御料地の樹木をなるべく保存活用し起伏のある地形を活かして池とその周辺に園路と築山が設けられている。人影の少ない閑寂とした庭園は都会の喧騒を離れていつまでも留まりたくなる空間を与えてくれる。また、茶室「光華（こうか）」は茶席が小間、広間、立礼席の三席からなり、本体が桟瓦葺、庇が柿葺の平屋建で天井が高く、全体に明るく開放的な造りとなっている、扁額も殿下の直筆である。外国人客をもてなす立礼席は戦前の茶室としては珍しく、ここも国の重要文化財となっている。

囲の間春寒を解く光あり　清秀
留め石の置かるる茶庭牡丹の芽　さち子

洋式庭園には幾つか彫刻が静かに並んでいる。「風」と名付けられた白い大理石の物体、イスラエルの彫刻家の作品と言われている二人背を向けた黒いオブジェ、その合間には白と黒の倚子が芝生にさりげなく置かれている。

陽春や倚子二個づつ芝の上　浩一

鷹鳩と化して幼児に追はれをり　正規

この邸宅は、普段は美術館として利用されていて、建物や装飾の撮影は残念ながら禁止である。当日は日本のシュールレアリスム作家の岡上淑子の作品が展示されていた。「沈黙の奇跡」と銘打った作品展は、写真を切り貼りした極めて前衛的な表現の作品が多い。九十一才で存命の作家の洗練された美意識と幻想的なイマジネーションは謎めいた摩訶不思議な世界である。

句会はいつもの様にカラオケ店にて三句出し四句選で行われ、春の長閑な一日を朝香宮邸のアール・デコの装飾の素晴らしさの余韻を残しながら、自句に春の思いを込め、各々の秀句を披露して散会となった。

■かさね吟行会■

日時　二〇一九年五月十日（金）
場所　大岡山精養軒にて
集合　大井町線　緑ヶ丘駅　十一時
申込　森岡陽子宛　(03)3712・2835

『酔いの徒然』（八五）

丸山酔宵子

『グスクの沖縄で思うこと』

名護市辺野古の埋め立て賛否を問う県民投票がスタートし、市内や主要道路の至る所に「反対に〇を」の赤い幟が立っている。沖縄は雨期にもかかわらず、雲間からの陽射しは初夏で、プロ野球キャンプの真っ最中。那覇空港到着ロビーには、春節も終わった平日にもかかわらず中国、台湾、韓国そして欧米人で一杯。

以前から、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」を訪ねたいと3泊4日の気ままな沖縄巡りである。グスクとは琉球王朝時代の〝城〟のことで、沖縄本島南部を中心に点在し、信仰における聖域の〝御嶽（うたき）〟や陵墓、庭園で構成されている。

今帰仁城（なきじんじょう）、座喜味城（ざきみじょう）、勝連城（かつれんじょう）、首里城（しゅりじょう）、識名園（しきなえん）、斎場御嶽（せーふぁうたき）など9ヵ所が文化遺産として保全されている。

グスク時代は12世紀から16世紀頃で、高度な石組み土木技術で造られた美しい曲線が続く強固な城壁である。どのグスクからもエメラルドグリーンの沖縄の海が見渡せる絶景の場所に立っていて、白い壁が南国の強い陽射しに輝いている。

琉球王国は元来、独立海洋国家として、中国や日本は勿論、朝鮮や東南アジアの国々との交易通じて生き抜いてきた。その平和を維持するために、健気にも中国への朝貢を進め、江戸幕府にも毎年使節を派遣し巧みなバランスを維持してきたのである。しかし、１６０９年薩摩藩による琉球侵攻により薩摩藩に支配され、明治になり沖縄県とされた。

１９４５年、蒼く広がる残波岬に突然現れた米軍艦船は１４００隻、そこから日米決戦の残酷で悲惨な戦場と化し、沖縄県民に多大な犠牲を強いたのである。その後のアメリカ沖縄統治を経て、１９７２年本土復帰を果たしたのである。

確かに、那覇空港から海岸沿いに走っていくと基地が

延々と続き、その周辺には商店や住居が密集し、危険と隣り合わせが実感で基地の沖縄への犠牲は否めない。しかし、率直に言えば、基地があることで仕事があり、生活できている人達も数多くいることも事実なのである。また、言いにくいことを敢えて言えば、その沖縄の犠牲に対する償いの、国家予算の投入は多岐にわたっている。

輝く海岸に沿って伸びる椰子並木のドライブウエイの素晴らしさ、ダイナミックな水族館を始めとする各種インフラ整備、エキゾチックでチャーミングな観光資源開発など、明るい未来に繋がっている現実もある。

基地問題での沖縄への負担偏重は速やかに解決しなければならないが、今、中国や韓国と問題となっているわが国の固有領土である、尖閣列島とか竹島に基地を持っていくことは、荒唐無稽な提案であろうか。

泡盛の香り遥かなシャム想う

酔宵子

楽しい時間　78

2019年3月31日

山本紀久雄

神にならなかった鉄舟・・・その八

最初に鉄舟の生誕地について、墨田区教育委員会から次の連絡が入ったことを報告したい。

「山岡鉄舟研究会会長　山本紀久雄 様

墨田区亀沢に設置しておりました山岡鉄舟の説明板は、本日（2018年12月19日）、板面交換を行い、別内容の説明板となりました。長らくお待ちいただきましてありがとうございました。取り急ぎ、ご報告させて頂きます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。墨田区教育委員会事務局・地域教育支援課文化財担当」

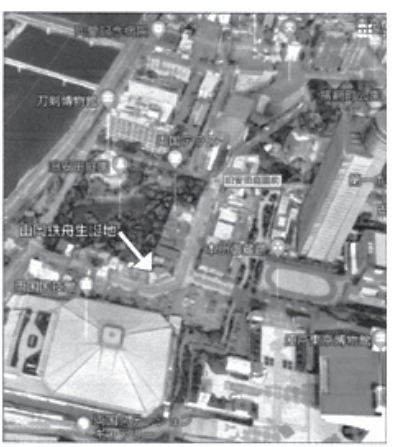
この件は、墨田区観光協会作成の観光マップによると「山岡鉄舟旧居跡」は、亀沢4丁目の墨田区立堅川中学校の校門あたりとなっていて、墨田区教育委員会は平成20年（2008）2月、同中学校内に《山岡鉄舟の生家小野家がこの中学校の正門の辺りにありました》とする説明板を設置した。

だが、この地を『復元江戸情報地図』（朝日新聞社）で確認すると、旗本「小野勇太郎」と表示されている。小野勇太郎は、『寛政譜以降旗本家百事典第1巻』（東洋書林）によると、禄高200石、拝領屋敷は本所永倉町と四谷南伊賀町の2カ所である。本所永倉町は現在の亀沢4丁目であり、堅川中学校現住所と一致する。

山岡鉄舟が生れたのは、御蔵奉行を務めた「小野朝右衛門」の役宅である。小野朝右衛門は禄高600石。その屋敷は『江戸幕府旗本人名事典』（原書房）によると両国向御蔵屋敷と表六番町。この両国向御蔵屋敷で鉄舟は生誕した。なお、表六番町の屋敷は、『復元江戸情報地図』に「火除明地」と記されており、これは現在の靖国神社の近くである。

このような説明を墨田区観光協会で説明したところ、「エリアマップの表示は教育委員会が認定したものに従っているので、教育委員会に行ってほしい」という回答。

そこで2017年2月28日に墨田区教育委員会へ行き、一連の史実関係書類に基づき説明をしたところ「史料は理解したので、再度、教育委員会内で整理確認し、説明板が設置されている地元の亀沢町会と調整し進めたいが、説明板の撤去期日については明確に約束できない」とのことであったが、ようやく1年10カ月を経て誤った鉄舟生誕地が訂正されてほっとしているところである。



鉄舟生誕の地

なお、正しい鉄舟生誕地は地図の⇒したところであるが、この

あたりは諸建築の工事中で、まだ史跡表示板は設置されていない。

山岡鉄舟研究会2019年1月例会は『月刊武道2018年10月号』（公益財団法人日本武道館発行）の表紙絵「山岡鉄舟・駿府談判」（下絵）を描いたアトリエ麻美乃絵・中村麻美先生の講演でした。テーマは「月刊『武道』表紙絵より～維新の英傑たち「駿府談判」ほか」で、次のように述べられました。

《1868年3月9日、幕臣・山岡鉄舟は、駿府に陣を構える官軍参謀・西郷隆盛に会談を申し込みました。江戸決戦は目前、駿府への道中は命がけの旅でした。

西郷は江戸総攻撃を中止する条件の一つとして「徳川慶喜を備前に預ける事」と提示しました。しかし鉄舟はこれに応じず抗弁します。「朝命なり」と凄む西郷に対し、鉄舟は毅然と問いただしました。「立場が逆ならば、あなたは主人である島津の殿様を差し出しますか」。激論の末、しばらく考えた西郷は「先生の言うことはもっともだ。慶喜殿のことはこの吉之助が必ず取り計らう」と約束します。江戸無血開城は、鉄舟のこの命がけの尽力により成ったのでした。

のちに西郷は、江戸の民を守り、主君への忠義も貫いた鉄舟を評します。「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るものなり。この仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」

剣・禅・書の三道を極めた鉄舟は、1880年に無刀流の開祖となります。「敵と相対する時、刀に依らずして心を以って心を打つ」と修養を重んずる鉄舟の理念は、今日あらゆる武道に受け継がれ、今に活かされています》

中村先生は的確に鉄舟を捉えておられます。なお、中村先生は『伝えたい日本のこころ』（日本武道館2016年9月発行）を出版されていますので、ご参考にされることを推薦いたします。なお、講演で中村先生は、表紙絵には鉄舟のみで西郷は描かれていない理由について次のように述べられました。

《鉄舟ひとりで薩摩軍に対したという意義を、島津の陣幕を大きく描くことで強調し、そこに鉄舟武士道精神を表現したかった》と。なるほどと思ったところに、もうひとつ鉄舟のみを描いた理由があるとも発言された。

それは明治神宮聖徳記念絵画館に展示されている有名な壁画、結城素明が描いた「江戸開城談判」と混同される恐れからとのこと。

この絵は、西郷が鉄舟との駿府で無血開城を実質的に決めた後に、江戸で勝海舟と会った場面を描いたもので、この西郷・勝会談で無血開城が決まったとする説が広く流布されている。表紙絵「山岡鉄舟・駿府談判」を鉄舟と西郷が対峙する構図で描くと、鉄舟を海舟と誤解する人が多く出て来るのではないかと、中村先生が危惧されたもので、その通りと思った次第であるが、実際には、この会談に鉄舟も同席していたわけで、とても残念である。

絹の話（102）

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

絹の来た道　これからの道　（その2）

絹の製法秘密厳守

中国で絹が作られてより、歴代の古代王朝はその製法が流布する事を禁じてきたようです。

先ず蚕種の流失を厳しく取締り、次いで製糸技術も制限したようです。

特に薄衣をしなやかに纏う事は権力者の象徴であり、富裕の証で有りました。

絹布は権力者から臣下に褒美、他国、他民族との外交品、上司から臣下に、臣下から上司に祝儀として盛んに使われていました。

絹を差配する事は権力者の大きな財源でもありました。今日でも使われている「羽振りが良い」とは、薄衣を靡かせて歩く姿を言ったものです。

絹の製法の伝播

中国の漢の時代になると、シルクロードが整備され、ローマや西方の国々との交易が盛んになって、絹の需要は高まるばかりでしたので、中央アジアからローマに至る国々では蚕種をなんとか入手し、自国で絹を作ろうと、時の中国の王朝に対してあれこれ画策するのですが、なかなか実現しませんでした。あるとき中央アジアの国の王子が中国王朝の姫と婚姻する事になり、中国からはるばる輿入れするとき髪飾りの中に蚕種を入れて来るように頼んだ、と云う話があるほどでした。

現在のアフガニスタン周辺の国々はシルクロードの中継貿易で栄え、そこを通ってシルクが運ばれて来るので、ローマの人々はシルクが中国ではなく中央アジアの何処かで作られていると信じていました。またローマの人々はシルクが何から作られているか知りませんでした。

やっとヨーロッパの入り口のトルコ（現在）に伝わるのが6世紀というのですから、絹が作られてより三千数百年、シルクローロが拓けてから千年弱シルクの製法の秘密を守ってきた歴代中国王朝の手腕に驚くばかりです。

東方の日本にはどうでしたでしょうか。

日本には日本在来種の中国とは違った「クワコ」がいましたので、これを利用して絹の紬を作っていたのかも知れませんが、養蚕技術は稲作と一緒に伝わったというのが定説です。稲作、即ち縄文後期なので、今から三千

数百年前には中国から家畜化された蚕種が伝えられたと思われます。そうすると中国の歴代王朝は極東の日本を含めて自国の範疇と考えていたのでしょうか。

後世、卑弥呼が魏の国に朝貢した時、献上した絹布は素朴なものであった様で、紬ではなかったでしょうか。魏の王からは当時の日本では見た事もない目映いばかりの錦織三反、平織り絹布百反を賜ったと魏志倭人伝に記されています。その当時まで日本には錦織は勿論、羽振りをきかす様な絹織物を作る技術は伝わっていなかったと考えられますが、それを必要とする権力が存在していなかったと言った方がよいかも知れません。

養蚕技術

生糸で絹布を得るには、繭の糸口を見つけて、3粒～10粒を合わせて揚げ、精練、撚糸して織物を作るのですが、紬糸を作る作業に比べて、大変精密な技術が要ります。中国の漢の時代以前には既に蝉の羽のように薄く、霧のように柔らかい絹織物が出来ていたのですが、4世紀の倭の国にはそこまでの技術が無かったと思われます。

日本が絹織物の技術を本格的に導入し始めたのは大和朝廷が確立する頃からで、その当時中国や朝鮮から大勢の職人集団が幾度も渡来して絹産業を興隆させて行くのです。その職人集団は大和周辺で技術を伝え、それが一段落すると、彼らに官位など付与して日本各地に移封し、その技術を各地に広めたのです。

三河の国にも彼らの移封があり、上質な繭を産する国として名声を高めてゆくのです。

絹の着用

三国志や韓国、日本の時代劇映画を見ると、支配階級の人々はいずれも艶のあるしなやかな衣装を着ています。

楊貴妃にしても高松塚古墳の壁画に描かれている女性達はみな薄衣を纏っています。

日本では各地で繭の生産が増し、絹加工技術移が一段落した大化の改新の時、貴族等官位ある人々の公式時には色で官位の区別をした絹の着用を義務づけました。

また当時宮中の祝事等のとき、祝儀の品として絹織物が盛んに諸臣に配られたといわれています。

現在のテレビ等で見る韓国の時代劇は位階による着用色がはっきり区別されていて参考になります。

但し、主に生糸をとった残りなどで作られる紬は、生糸に比べて艶がなく、しなやかさにも欠けますので庶民にも着用が許されていしました。

この事は江戸時代まで続きますので、絹は庶民には身近で遠い存在になって行くのです。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田勇気

2019年4月3日

皮膚の乾燥と花粉症

透き通るような青い空
朝からありがたく感じます
相変わらず花粉が凄いですね（苦笑）
そこで今回は
普通の花粉の予防法にプラス
というところに観点を置きたいと思います
アレルギー物質は本来
皮膚からの侵入というのが
多いといわれています
花粉症は
目や鼻や口　ですが
症状が強く出る方は
もしかすると
身体のどこかが乾燥していて
少量の花粉でも
そこと結合してアレルギー反応が
強く出ている可能性があります
例えば脇腹や顔や脚などなど・・・
心当たりのある方は
身体の乾燥部位を見つけ
ワセリンや馬油で乾燥を防いでみましょう

2019年4月5日

手の乾燥

陽射しは暖かいですが
風が冷たいですね
くれぐれも
寒い　と感じないように
身体を冷やさない様に
していきましょう
前回　皮膚の乾燥について
書きました
今回は
保湿の仕方　について書きたいと思います
普段から　ワセリン　馬油
をお勧めしていますが
それは
身体の保湿力を落とさない為
なんですが
ワセリン系　だけでは
乾燥がおさまらない
という方に
手などよく使う場所は
ワセリン系の上から
ハンドクリームを塗布することを
お勧めします
沢山手を使っても
取れるのはハンドクリームだけ
しかもハンドクリームによって
ワセリン系も取れずらくなるし
手もワセリン系に守られ続けます
その際
ハンドクリームは定期的に塗布すると
より良いですよね

「江上浩二の独り言」17

江　上　浩　二

911と割り箸袋

最近（平成31年3月）、部屋を片付けていると、ある店の割り箸袋が出てきた。そこには店の場所を示す手書きのメモが見える。よく見ると米国NYマンハッタンにある和食店のものだ。それを見て〝さーと〟記憶が蘇ってきた。それは大事故・大事件が起きてから9年も経って書いた次の様なブログで、是非お読み頂きたい。

マイブログより　2010年9月12日

私がわざわざ、2001年の9月11日（米国時間朝）に貿易センタービルに時間をおいて2機の飛行機が突っ込んだ忌まわしい事件について詮索することは出来ないし、そんな詳しい話も知らない。ただこんな離れた日本人でも少しは影響があったことを書き留めておきたい。

その911事件の約1年前、私はちょうどNYCのマンハッタンを訪れ、市内のホテルの1室で当時勤めていた外資企業の仕事で本社の連中、日本企業の方との会議に同席していた。会議も終わり、参加していたメンバーがそれぞれNYを離れ、私一人だけが翌日移動するフライトのスケジュールに合わせて、連泊をする事になった。

2000年ごろにはNY市も当時の市長の努力のおかげで治安も回復しつつあり、私は会議後、夕飯にありつく為にマンハッタンの通りを一人でうろうろしていた。夜の時間も進み、日本人らしきアジア人数人のグループが20－30m前を行っていた。そこで、勘だか、おそらくその日本人らしき連中も腹をすかして、NYCでもしや和食屋を目指しているのではないかとおもい、なんとなく後を追った。やはり、正解で大通りから路地に入り、薄暗い道を進むと活けすを備えた和食屋へたどり着いた。当然、私は予約なしで飛び込む形で一人和食を味会う機会を得たのである。〈そこで味わった和食に添えられた割り箸の袋が2019年3月という最近に見つかったのである。〉そんな風にNYCの暗い夜道をのんびり歩けるくらいに治安が回復してきたのだと実感した次第であった。

さて、その和食屋での出来事（昔し岩国基地に勤務していたという米国人老夫婦の話し）もあるが、それは割愛して、1年後に迫った2001年9月11日日本時間夕刻、私の部下が米国へ向けてお客さんとの会議がある為

に成田から出国した話をしたい。当時、台風が来ており鉄道などの交通の便が非常に悪い中、部下は乗り継ぎ、最後はタクシーで空港へたどり着き、やっとのことで米国便へ搭乗した。

私がその夜帰宅し、ＴＶを観るとＣＮＮがちょうど２機目がビルへ突っ込む様子を放映していた時間であった。始め、あんなマンハッタン上空へ大型ジェット機がうろうろするのは故障でコントロールを失った状況へ陥ったのかと思ったくらいである。そんな混乱している状況で、国際フライトでアメリカへ入国着陸しようとしているものは近場へ緊急着陸させられたというニュースがＴＶを駆け巡っていた。

もちろん部下の乗ったフライトもどこかへ強制着陸させられたようだが、その実態が日本時間の翌日になっても解らなかった。日本の航空会社はｘｘ便はどこへ着陸し、ｘｘのホテルに向かっているとか、宿泊中だとかの情報が出始めたが、米国航空会社のフライトではそんな情報は得られなかった状況であった。数日して本人から、ｘｘへ移動させられ、ｘｘホテルにいますと言う連絡があった時はホットしたと同時に、御家族の方が心配されていたのにどうにも出来なかった事が歯がゆく、申し訳ないと率直に思った次第である。

９１１と全然関係なさそうな私であったか、今お話しした程度の影響に済んだ。幸いにも、アメリカ本社の友人、知り合いでその９１１の惨劇に巻き込まれたということにもならなかった。そんな、９年も経とうとしていた最中、最近本当に御近所でお店をしている方と話す機会があり、〝私の日本人の友達（夫婦で貿易センタービルのかなり上の階でレストランをやっていた方）が９１１に巻き込まれて亡くなったんです。〟ということを知った。

異文化、異なる宗教を信奉し、異なった民族が移民ということで集まった国を新たに形成し、営まれているアメリカは人類の新しい実験をしているかのごとく、従来型の単文化、単民族が営む比較的小さな国とは違って、目に見えない対立が表層化し、あちこちで毎日紛争の様なニュースが駆け巡っている。是非とも、日本がこのようなダイナミックに浮き沈みしている世界の状況を理解し、自らの立ち位置を確認してみたらと想う。

２０１０年９月12日記す
追記２０１９年３月28日

漢詩研修（三十一）

千代田岳精会　平井茂行

清明　杜牧

清明の時節雨紛紛
路上の行人魂を断んと欲す
借問す酒家は何れの処にか有る
牧童遥に指す杏花の村

清明時節雨紛紛　路上行人欲断魂
借問酒家何處有　牧童遥指杏花村

【作者】 杜牧（八〇三～八五三）晩唐の詩人。京兆万年（陝西省長安県）の人。字は牧之。号は樊川。長安の名門階級に生まれる。八二八年、二十五歳で進士に及第、官吏となる。晩唐の繊細な技巧的風潮を排し、平明で豪放な詩を作った。風流詩と詠史、時事諷詠を得意とし、艶麗と剛健の両面を持つ。七言絶句に優れた作品が多い。杜甫の「老杜」に対し「小杜」と呼ばれ、同時代の李商隠と共に「晩唐の李杜」とも称される。李白、韓癒、柳宗元の影響を受けた。

【語釈】 ○清明・・・二十四節気の一つで、春分から十五日目。陰暦の三月、陽暦の四月五日頃。○粉粉・・・多く盛んなさま。○路上行人・・・路傍の旅人。○欲断魂・・・心が滅入る。もの悲しくなる。○借問・・・借は仮に。試みに問う事。

【通釈】 清明の季節であるのに雨は降りしきっている。雨宿りをしていた一人の旅人は、酒でも飲んで滅入る心を晴らそうと思い、通り合わせた牛飼いの少年に、近くに酒屋は無いかと尋ねると、遥かかなた、杏の花咲く村を指さして教えるのであった。

【鑑賞】 杏の花咲く村落の風景が絵の如く浮かぶ。絵画的な叙景詩である。詩の構造は平起こり七言絶句の形であって、上平声十二文（ぶん）韻の粉と十三元（げん）韻の魂、村の字が通韻として使われている。

『奥の細道　その旅立ち』

中屋保之

元禄二年三月二七日～九月六日（四六歳）

（序）

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかへ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春改れは、霞の空に、白川の関こえむと、そゝろかみの物につきてこゝをくるはせ、道祖神のまねきにあひて取もの手につかす、もゝ引の破をつゝり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月、先心もとなし。住る方は人に譲りて、杉風か別墅に移るに、

草の戸も住替る代そひなの家

面八句を書きて、庵の柱に懸置

芭蕉は（序）おいて、敬慕している李白の詩を引いている。

『春夜宴桃李園序』　李白

夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。（夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。）而浮生若夢、為歓幾何。（而して浮生は夢のごとし、歓を為すこと幾何そ。）

山本健吉氏は『奥の細道　現代語訳・鑑賞』で「花は根に鳥は古巣に帰るなり　春のとまりを知る人ぞなき（崇徳院御製千載集）を紹介し、「こういう歌や詩をもとにして、芭蕉はこの惜春の句を作ったのではない。だが、そういう伝統的な発想が、まったくなかったとも言いきれない。あるいはまた、動物たちが啼泣している釈迦涅槃図も、芭蕉の意識にあったかもしれない」と著している。

「奥の細道」の拙い一読者としては、後半部分にロマンを感じる。

（千住旅立ち：元禄二年三月二七日）

弥生も末の七日、元禄二とせにや、明ほのゝ空朧々として、月は有あけにて、光をさまれる物から、富士の峯かすくわに見えて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心ほそし。むつましきかきりは宵よりつとひて、舟に乗て送る。千しゅと云所にて船をあかれば、前途三千里のおもひ胸にふさかりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく。

行春や鳥啼魚の目は泪

これを矢立の初として、行道猶す、ます。人々は途中に立ならひて、後かけの見ゆるまてはと、見送なるべし。

芭蕉が門人曽良と共に深川を出立したのが、元禄二年（一六八九）三月二七日というから、陽暦五月十六日にあたる初夏の新緑の頃であろうか。深川から船に乗り、奥羽街道の第一番目の宿場である千住（現在の千住大橋の下手あたりか？）に午前十一時頃に上がったといわれている。「幻のちまたに離別の泪をそゝく」に、ここで見送る人々に別れを告げる芭蕉の心境が読み取れる。

杜甫の「春望」に

感時花濺涙　　時に感じては花にも涙を濺ぎ
恨別鳥驚心　　別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

とある。これまた、芭蕉が愛して止まない杜甫への思いの深さに感心させられる。。

（草加　室の八島：　元禄に年三月二十九日）

此たひ、奥羽長途の行脚、たゝかりそめにおもひ立ちて、呉天に白髪の恨を重ぬといへとも、耳にふれていまだ目に見ぬ境、若生て帰らはと定なき頼の末を楽て、其日、漸々早加と云宿にたとり着にけり。痩骨の肩にか、れる物、先くるしむ。唯身すからにと拵出立侍を、帋子一衣は夜ル臥為と云、ゆかた、雨具、墨、筆のたくひ、あるはさりかたき花むけなとしたるは、さすかに打捨かたく、日々路頭の煩となれるこそわりなけれ。

室の八嶋に詣す。同行曾良が曰、「此神は木の花さくや姫の神と申て富士一躰也。無戸室に入て焼たまふちかひのみ中に、火々出見のみこと生れ給ひしより室の八嶋と申。又煙を読習し侍もこの謂也」。将このしろと云魚を禁す。縁起の旨世に傳ふ事も侍し。

室の八島は下野国都賀郡にある室の大神神社のことで、野中の清水から立ち昇る水気が煙のように見えることから、中世以来の歌枕となったそうである。

木の花さくや姫伝説＝サクラの語源は「木花咲耶姫」から来たと言われている。開花した木の花（桜）の女神で、美と短命の象徴とも。

《参考文献　芭蕉自筆奥の細道（上野洋三・櫻井武次郎校注）奥の細道　現代語訳・鑑賞（山本健吉著）》

沼津での牧水ゆかりの地を巡って（三）

沼津　鈴木孝雄

千本松原とは、富士川などから駿河湾に運ばれた砂や石が堆積して形成された州に育った黒松が、狩野川河口から田子の浦までの一〇㎞に及ぶ松林。古来より名勝として、例えば鎌倉時代の紀行文「東関紀行」にも紹介されている。しかし、戦国時代、武田軍対北条軍の戦いの中、合戦の妨げになるとの理由で伐採されてしまう。その結果、農民たちは風害・塩害に悩まされる。それを見かねた増誉上人が松の苗を一本植えては経文を唱え、長い年月をかけて松林を再興した。

駿河湾・千本松原・愛鷹山・富士山の織りなす景観は、写真に示すように誠に雄大。牧水は冬の海の情景を次のように詠っている。

冬の海にうねりあひたる大きうねり
ひまなくうねり山なせるかも
相打てる浪はてしなき冬の海の
ひたと黒みつ日の落ちぬれば

大正一五年夏、静岡県から財源確保のため千本松原の松を伐採する案が示された。これに反対して牧水は、地元の新聞ばかりでなく「東京時事新報」にも檄文を載せている。また伐採計画反対の市民運動の先頭に立って、慣れない演説も行った。こうした反対に、県は伐採計画を撤回せざるを得なかった。千本松原をいとおしく思いさぞ安堵したであろう。

黒松の老木がうれの葉のしげみ
真黒なるかも仰ぎつつ見れば
茂りあふ松の葉かげにこもりたる
日ざしは冬のむらさきにして

一方、多額の借金の返済のため、各地の揮毫旅行先は

次第に遠くなり、大正一五年には北海道、さらに昭和二年には朝鮮半島まで足を伸ばさざるを得なかった。朝鮮の金剛山を訪れた時にかかった風土病のため、体調をすっかり崩した。昭和三年初夏の頃の歌に、

妻が眼を盗みて飲める酒なれば
煌て飲み咽せ鼻ゆこばしつ

とあるように、酒を絶たねばならぬほどの健康状態だった。そして、昭和三年九月一七日朝自宅で、わずか四四歳の生涯を閉じた。

遺骨は牧水が愛した千本松原の近く、松原再興の恩人増誉上人を開基とする千本山乗運寺（図一の③）に埋葬された。お墓には牧水の短歌が刻まれている。

聞きゐつつたのしくもあるか松風の
今は夢ともうつつともきこゆ

（つづく）

駿河湾から千本松原・富士山を望む

「歴代天皇御製歌」（九十九）

貫名海屋資料館

『古事記』『日本書紀』の歌謡は、主に皇族方の作、力強く、精妙な表現がなされている。聖徳太子以後、舒明天皇、斉明天皇、天智天皇、天武天皇、持統天皇・・・とすぐれた歌を残された。

『萬葉集』の編纂は、大伴家持による部分が多いといわれているが、天皇方をはじめ皇族がたから、「防人（さきもり）」、「防人の妻」、「名もなき地方民」、全国民の歌が集められてある。『萬葉集』は、天皇と、国民が心を通わす歌を集めた大歌集となる。

平安時代初期の学問が、大唐一辺倒の漢詩文中心であり、それに対する和歌は『古今集』の撰集となり、漢詩文をのこした菅原道眞は、遣唐使の後、『新撰萬葉集』を撰した。道眞の和歌は『大鐘』に残された。

『古今集』の撰者、紀貫之は、「男もすなる日記といふものを女もしてみんとてするなり」ではじまる『土佐日記』、紫式部の『源氏物語』をかな書きの散文文学をなした。

『古今集』の和文序、「ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、めにみえぬ鬼神をもあはれと思はせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきもの、ふの心をもなぐさむるはうたなり」と紀貫之は言っている。

歌は宗教・倫理、人の心をみちびくものといふのである。歌をよめないことは、教養の低いこととされたのだった。うたは、はじめ君臣の心を通はす方であって、政治の根本、貴族階級の独占的教養のようになり衰え、鎌倉時代になり、後鳥羽上皇の『新古今集』の序文、「色にふけり心をのぶるなかだちとし、世ををさめ民をやはらぐる道とせり」、まず『萬葉集』を読むようすすめてをられる。

この時代、藤原俊成、西行、藤原定家・・・和歌が盛んになった。源實朝、神儒佛三道を表現。

○山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも『金塊和歌集』
○もの言はぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ
○神といひ佛といふもよのなかの人の心のほかのものかは

鎌倉時代、無住法師の著『沙石集』
「和歌の一道を思ひ解くに、散乱麁動（そどう）の心をやめ、寂然静閑なる徳あり。又言すくなくして心をふくめり。惣持（そうじ）の義あるべし。惣持といふは、即ち陀羅尼なり」。陀羅尼とは、梵語Dharani総持・能持と訳し、「眞言」の意。
当時の宗教家、慈圓、道元、明恵、この三人の名僧には、それぞれの歌集がある。佛の道を、歌の道とは両立している。

元の襲来は、国民的自覚を目ざまして、後醍醐天皇の建武の中興となるが、南朝の悲歌が生まれる。当代の代表的歌人は宗良親王であり、歌集『李花集』『新葉集』には、南朝の悲歌がある。
南北朝の対立のなかから、蓮如、上杉謙信、武田信玄、豊臣秀吉の秀歌が生まれる。
秀吉が聚楽第に後陽成天皇をお迎へして、公卿諸将に和歌を献上せしめたことは、和歌史上の盛儀であった。

武田信玄
君を祈る賀茂の社（やしろ）のゆふたすきかけて幾代か我も仕へむ

上杉謙信
極楽も地獄もさきは有明の月の心にかかる雲なし

豊臣秀吉
なべて世に仰ぐ神風ふきそひてひびき涼しき筥崎（はこざき）の松
萬代（よろづよ）の君がみゆきになれなれむ緑木高き軒の玉松（聚楽第行幸の折）

「欲望と歳月」

大橋望彦

病院の介護師さんと話しをしていて、いつの間にか「欲望」が歳を取ると変って来る様ですが、どうしてですか、と質問された。突然のことでちゃんとした考えもなく、「欲望は個人が作るものだから、それぞれの個人が歳を取ればそれなりに欲望も変るでしょう」と可成り、いい加減な返事をしてしまった。

後になって正確な返事をしなくてはと思い「欲望」のことをもう一度考え直し出したらば、いやー意外と難しい。先ず、発生学的には脳組織は早い時期から完成し、色々な機能が働いて居り、一寸考えて見てもこの時に個性が生まれてきても不思議ではない。

その一種のシンクロナイズの発生は成人式に至る、あるいはそれ以上まで続く様である。そうしてみると、当然乍ら脳の環境支配下にある成育の仕方に差が出るのは歴然としてくる。これは脳の組織の構成のみならず、思考の構造も当然のこと乍ら変ってくる。

脳の発達の違いは誰一人も同じ脳が出来ることのないことは明らかであるが、逆に、日本では義務教育で、小学校中学校では同じ教育を受けることになっている。これ丈同じ教育をやればほゞ同じ人間が（同じような脳を持った）出来るだろうと誰が考えたのだろうか。

精神構造がほゞ同じ人間が形成されるだろうと考えたのではないか。これは、あまり無謀過ぎる考えであった。或る老人ホームに行き細かい所まで観察することが出来たが、年代もそれぞれ異なるが、同時世代がほゞ同じ時代で。

欲望は自ら作るものであると答をだしたが、全てそうかというと一寸違っている。欲望を生じてもそれに対抗してその欲望を抑える力が働き、それがかえって強くなる場合がある。これは一見すると、無欲の様に見えるが実は大変強い欲望を持っていることもある。人間とは実に判り難い生物である。歳寄りの感じ方は、実はこの様な複雑な感じ方をしている方が意外と多く、しかもそういう方は意見として表現せず、たゞ黙っている方が多い。どうせ自分が云っても判ってくれない、黙っている方が面倒くさくないと思うのであろう。

竹の子堀り

夏目勝弘

竹の子掘り毎年、彼岸のお墓参りに無住となった檀家寺の竹藪に行くのが、春の仕事始めである。

今年は氷の張ることもなく、冬が過ぎたので、竹の子の出るのも少しは早くなるのではないのかと思い、三月十日にお寺の竹藪に入ってみた。

広い竹藪が三ヶ所あるが、一番早く竹の子が出る場所は、三ヶ所のうち北にある藪のある一角の十メートル四方の所である。

今年も、先ずその場所に行き、足裏に神経を集中させて歩いたが、反応が無い、ようやく竹藪の薄暗さにも目が慣れてきた。

目と足に集中させながら、例年出る当りの枯れ葉を捌いてみた。爪楊枝ほどの竹の子の穂先が見えた。

少し土を除けてみたが、まだ小さい。掘るのをやめた。

このまま掘らずに置いても太くなることはないが、また枯れ葉を掛け次をと三十分余り探したが見付からない。

まだ少し早すぎると思いながら、南にある竹藪へ行ってみたが無駄であった。

その後、雨の降るのを待ち二度ほど行ったが二回ともまた一本ずつしか目に付かなかった。

それも小さな物ばかり、唐鍬を担ぎただ藪の中を歩き帰ってきた。今日の一日の運動量を満たしたのみである。

三月二十五日に運動のつもりでまた上り坂の道を竹藪へと向う。今日は少し違う場所で探してみることにした。

枯れ葉が不自然に少し盛り上がっているのが目に付く。枯れ葉を指で取ってみる。竹の子である。やや形の良い一本。

竹の子の穂先の曲りを確かめ、根本の方向と竹の子の大きさを予測し、唐鍬を入れる。

根本を確認して、唐鍬を一撃、今年の待望の一本を手にすることが出来た。

そして思わぬ所に、穂先のみが五ミリほど見えている。太い孟宗竹の根本のため、掘るのが大変だと思ったが易やすと掘れた。

これ以上この北の竹藪では、見付けることは出来ず、北と南の中間にある竹藪に入ってすぐ一本を掘る。その一本のみであった。

次に南の竹藪に沿う草の道を探して行くと草の道の外れの畑との境に、竹の子の先が三センチ程出ている。やや緑がかっているので少しアクが強いが、掘ることにした。

今日の五本は、昨年より予約のあった食堂に持って行くことにした。

その代価は（ウレシイ）と一杯のコーヒーである。約束が果せて安堵。

桜の開花のニュースの聞かれるようになったころ、竹の子も出始める。少しばかりの気温の変化では、変りなく例年と同じようである。

ちなみに、孟宗竹は日本名、室井綽著、「竹の記」によると（中国二十四考の伝説の孟宗が厳寒中、病める母へ好物の筍を食べさせるために、藪の中で思案していたとき、ひょっこりと頭をもたげて母に孝養をつくすことができたという話題の竹である。

中国では、竹の皮に黒褐色の粗毛が多いところから、その特殊形態を名として標準漢名は「毛竹」である。

春に一番うまい風味ある筍というと日本人の大半がモウソウチクと信じている。鹿児島では、大名竹・ホテイチク、モウソウチク、と四番目。とある。

御津磯夫短歌鑑賞　17

「月虹」　鮫島　満

羊歯の芽の渦葉ひらきてともしびの中の一首をわれは暗記す

『月下の華』昭和五十九年

初・二句は「羊歯の芽の渦葉ひらきて」と括弧で括るべきところだが、作者はそのような些事にはこだわらない。この初・二句は斎藤茂吉歌集『ともしび』所収の、

ここにもほそく萌えにし羊歯の芽の渦葉ひらきて
行春のあめ　　大正二年作

の三・四句をそのまま引用したものである。歌を引用するときはふつうは初・二句をもって済ませるものであるが、磯夫はこの歌の要を外してはならぬと思ったのであろう。茂吉のこの歌は結句を題名にした「行春のあめ」一連十一首中の一首目である。初句を「ここにも」と字足らずにして読む人の注意を引き、それが幾つも見られることを強調している。一連は「春」の到来を詠んだものであり、羊歯も、

よるふけて思ひだしたりうづまける羊歯のもえこそあはれなりしか
わがこころしづかになりて見て居るは油ぎりたる羊歯のむらだち

と詠んでいる。ほかの「はしけやしこの身なげきて虎杖のひいづるときになりにけるかも」「うまれし国にかへりきたりてゆふされば韮をくひたり心しづかに」「かすかなる虫のあそびも見ゆるなり日にてらされし擬宝珠の葉に」などにも春の到来をしみじみと喜ぶさまが詠まれている。

磯夫が、茂吉の歌の要の句を初・二句に置いたのはそれが自分の喜びでもあるからであろう。私は作者の屋敷内の庭のことは直接には知らないが多くの歌から察するに、植えたもの、生えたものなどが多く手入れを怠ると厄介なことにな成りかねない様相を呈していたのではないかと思うほどだから、羊歯も少なからず生えていて親しみをもっていたのではないかと思われる。

因みに、「渦葉」は茂吉の造語かと思われる。

「氷魚」のことから（220）

岡本八千代

彼岸のお中日も昨日にすぎて、今日は午後から陽が照りだした。なんとなく、割り切れないような私の心まで明るくなってきた。

伊藤左千夫によって創刊されるようになった「アララギ」は彼の連作説と万葉集崇拝という二つの中心的な主義に基づいて発行されていたのだった。しかし、左千夫の後継者となった島木赤彦はこの二つの主義をそのまま受け継いでいったのであったが、その晩年に到るに従って、赤彦は赤彦らしい独自の歌風に変っていった。（以下赤彦の歌）

〝森深く鳥鳴きやみてたそがるる木の間の水のほの明りかも〟

Deep in the forest
The birds cease their singing,
Ah, the glimmering light
Of water glimpsed through the trees

〝まかがやく夕焼空の下にして凍らむとする湖の静けさ〟

As day draws to a close!
The sky at sunset
Blazing to incandescence,
And underneath it
The stillness of the lake

〝みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ〟

As its waters turn to ice.
Out on the lake
This ice has melted,
But still it is cold.
The crescent moon's reflection
Glitters on the waves.

〝信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ〟

When will it turn spring
Along the Shinano Road?
After the evening sun
Has set for a while there lingers
A yellow color in the sky.

赤彦は、短歌の形式が東洋的詩人の特徴であると考えて、心の表現をする理想的なものという考えをもったらしい。私の書いている「『氷魚』のことから」の「氷魚」はここから取ったものである。「まかがやく」、「みづうみの」の歌の抒情性に感動した私。

最後にあげた「信濃路は」の歌は、赤彦が死の床で詠んだ高い評価を受けた歌である。

また、赤彦は童謡作家でもあり、「万葉集」の詳釈社でも知られている人でもあった。

かくして、子規から始まった「アララギ」は今なお続いている、といってもいいかもしれな。「三河アララギ」の「三河」はアララギ歌人・御津磯夫先生が三河へ帰られたので、「三河」をつけて始まった会である。今もって、自分の歌を勉強したいものと思う私。

（参考図書・ドナルドキーン著　新井潤美訳）

編集室だより【二〇一九年三月】

今泉　由利

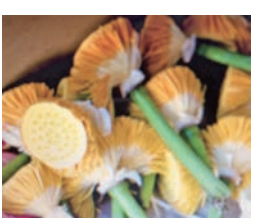
○目黒・庭園美術館へ吟行。
庭園美術館の隣は、武蔵野を残す自然教育園があり、学生時代からよくスケッチに出掛けたところ。その時からの馴染みの木々草々があるのだから、しばしば逢いにゆく。そして隣の旧朝香宮邸、吉田茂氏の外務大臣邸であった庭園美術館のアール・デコ様式の建物、調度を楽しんだ。
この吟行は、とても楽しみだったけれど、丁度、他の人の展覧会をしていて、目指したアール・デコが見え隠れ。がっかり。春の様子になってきている日本庭園、西洋庭園、芝の広場…を楽しんだ。

○千代田フィルハーモニー管弦楽団、第68回、定期演奏会。
上智大学のグランドを見下ろす桜並木の花見の人々をぬって紀尾井ホールまで。
指揮・和久井仁（NHK交響楽団オーボエ奏者）
ヴァイオリン独奏・相川麻里子
ブラームス・・悲劇的序曲　OP・81
ブルッフ・・ヴァイオリン協奏曲、第一番　ト短調　OP・26
シューマン・・交響曲　第三番　変ホ長調　OP・97
異次元のロマンに壮麗にいざなわれ、身も心もリフレッシュ。貴重な時を過すのでした。

○今泉雅勝氏の「絹の来た道」講演
①絹の誕生（3000～5000年前　中国）クワコの家畜化に成功（生繰りが容易）
②蝉翼火因霧＝綺麗
③絹という字の広がり（糸、絲、綿、緜、絮、綺、紬、紡、紗、羅、錦、・・・）
④七夕祭りは絹祭り　鶴の恩返し
⑤シルクロードの開発…匈奴の勃興と民族移動…物流（当時絹はローマでセレスと呼ばれた）
⑥魏志倭人伝（3世紀）…日本と中国の製糸技術の差…絹技術者の大挙来日
⑦大化の改新（租庸調）…貴族は絹を着用、庶民に絹の着用を禁ず
⑧白村江の戦（7世紀）…神功皇后の緜甲冑と腹帯岩　田姫と綿帽子、花嫁の角隠し
⑨遣唐使の給料（10世紀延喜式　大使…あし絹60匹（1440m）麻布150匹　緜150屯（33・57kg）学僧…大使の半額　水夫…緜900g　麻布4匹　夏冬衣2着　注：緜（玉繭の上質真綿）絮（屑繭の綿）
⑩蒙古襲来と日本刀
⑪平面繭と武士の下着
⑫ヨーロッパ全域に微粒子病の発生とアヘン戦争　明治の絹の殖産興業（富岡製糸場）輸出
⑬絹と零戦、落下傘、北支派遣軍
⑭ナイロンの出現による絹の消費低迷

来月につづく

野菜・まんだら　（15）ハス（スイレン科）



○原産・仏教発祥の地　インドがハスの発祥地であると言われている。古い時代に中国に伝わり、日本に2000年以上前渡来した。今、イラン、インド、中国、オーストラリア、熱帯アジアに広く分布し、栽培される。

○葉には、長い葉柄があり、水面に浮く浮葉と、水面より上に出る水上葉の2種があり、葉表には無数の小突起があり、それにより水滴が転がる。

○葉柄の上に花が単生し、花托の上面のハチの巣のような孔の中の果実を蓮実とよぶ。冬、地上部が枯れ、根茎を掘り採ると蓮根。

○早朝、開花前の蓮の花を摘み、手作業で（雄しべの先の葯）だけを集め、茶葉とまぜて香を移し、葯のまざった蓮茶は、ベトナムでいただいた。

○花托に含まれる果実をとり出し、皮をとり、ハスの実。炊き込んだおこわやおかゆ。薬膳料理の材料に用いられる。ハスの実の甘納豆。シロップ煮。様々な菓子に。

○蓮根の糸は、ムチンという糖タンパク質による。ムチンには滋養強壮作用。

○蓮根の切り口が黒ずむのはタンニンが含まれているため。タンニンは消炎、止血作用、消化・吸収力を強化。

○その他、不溶性の食物繊維、ビタミンC。外界から進入するウィルスに対する抵抗力を高め、ストレスに強い身体に。

○美しく、美味しく、薬効あり。

今泉由利

第三十三回

全国短歌フォーラム in 塩尻

短歌と出会えるまち「塩尻」。短歌で思いを表現する文化を大切にし、短歌のすばらしさを全国に発信しています。

題詠「駅」

※「駅」の単語を詠み込まなくてもよい

投稿歌募集

申込締切 6月20日(木)

ホームページからも投稿できます。

■応募規定　一人二首まで。自由題一首と題詠歌一首の合計二首(どちらか一首でも可)
題詠「駅」※投稿は自作未発表作品に限る

■投稿料　1,000円(一人あたり、一首二首同額)

■作品集代　1,000円(希望される方は投稿時にご注文下さい。)

■応募方法　所定の投稿用紙か400字詰め原稿用紙の右半分に作品・左半分に住所・氏名・電話番号・当日参加の有無を記入し送付ください。

■払込方法　定額小為替(郵便局で購入)を投稿歌に同封するか郵便局備付払込取扱票で「口座番号00560-6-83649 全国短歌フォーラム実行委員会」に振込

■申込締切　6月20日(木)(当日消印有効)

■主催　長野県塩尻市／塩尻市教育委員会／全国短歌フォーラム実行委員会

■大会期日　9月21日(土)・22日(日)

■会場　塩尻市文化会館 レザンホール

■選者　佐佐木幸綱 氏・永田和宏 氏・小島ゆかり 氏

■大会内容　投稿歌選評、表彰式、記念講演会

■表彰　最優秀・優秀・入選・奨励賞

■発表　フォーラム当日と全国短歌フォーラムホームページ https://tanka.shiojiri.com/

■申込先　〒399-0738 長野県塩尻市大門7-4-3 全国短歌フォーラム事務局 電話 0263-52-0903(直)　ファクス 0263-53-7604

※ご連絡くだされば募集要項(投稿用紙)をお送りいたします。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL (〇三) 五九二四-二〇六五

◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制　廃止。

◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。

◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九

◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。